

## シンポジウム趣旨説明

## 「地域資源の歴史地理」研究の課題

湯澤規子

2015年度大会では「地域資源の歴史地理」と題するシンポジウムを山形県立米沢女子短期大学にて開催した。今回は、1年目にシンポジウムを開催することによって、「共同課題」として歴史地理学が目指すべき方向性や課題を集約し、2年目に広く会員からこの課題を踏まえた共同課題発表を募ることになった。

本大会で「地域資源」をテーマとした理由には、以下のような2つの研究動向が関わっている。1つ目は近年、地理学や様々な社会活動の中で「地域資源」という言葉がしばしば用いられ、活用が模索されていることである<sup>1)</sup>。しかし、その概念規定は曖昧で、用いられる場や文脈によって様々な意味を含んでいるのが現状である<sup>2)</sup>。2つ目は、昨今では、地理学以外の様々な分野においても「地域資源」に関わる諸事象が活発に議論されていることである。そのため、「地域資源」をプラットフォームとした分野横断的な議論が活発化しつつある<sup>3)</sup>。このような2つの動向を受けて、今まさに歴史地理学という立場から、あらためて資源を「地域」という視点から組み込んで整理し、体系化する意義は大きいと思われる<sup>4)</sup>。

こうした動向を取り巻く社会状況は、近年「地酒」、「地野菜」、「地魚」、「地油」など、「地」に含意される個性や独自性に価値を見出す風潮の高まりにも表れている。この場合、「地」が持つ個性の問い直しには、とり

わけ高度経済成長期以降、その進行が止まらない地方の衰退と、その背景としての価値観の均一化や単純化へのアンチテーゼという意味が込められているように思われる。こう考えるならば、「地域」とは、単なる領域のまとめりというよりもむしろ国家や中央 (National) に対するもう1つの主体としての地域 (Local) であると意味づけることができる。本シンポジウムで「地域資源」に着目する意図は、「地域 (Local)」に内在する主体性、独自性を見出し、それが時代によって、あるいは地域によって国家や中央との間で、どのように変化し、抵抗し、再編されてきたのかを考えようとするところにある。

したがって、これまで地理学で蓄積されてきたいわゆる「資源論」に対して、本シンポジウムで議論しようとする「地域資源論」は異なる立場をとることになる。それは第1に、「資源」という概念自体を問い直すということである。「資源」という概念は、狭義には暮らしや産業の原材料として自然から人間が取り出した物質 (鉱物、土地、水など) を意味し、そこからエネルギー資源、食料資源が生産される。そして、より広義には、狭義の資源に加えて産業や社会を支えるものをすべて意味する。これまでの「資源論」は主に、ここでいう狭義の資源を対象としてきた。それに対して本シンポジウムの「地域資源論」では広義の資源を含めた議論を展開したい<sup>5)</sup>。

第2は、資源をめぐる主体の問題である。

これまでの資源論では主に、国の「富源」としての資源に着目してきたために、おのずとその主体は国や権力者となる。しかし、自然が地域的個性を持つ以上、本来、資源は地域的なものであり、その利用や分配には地域の論理が色濃く反映されているはずである。したがって、もう1つの主体として、地域の人びとの資源へのアクセスや利権が問われなければならない。「地域資源論」では、こうした複数の主体が資源をめぐるせめぎ合う局面をも含めた議論の深化を意図している。

この2つの視点を新たに加えることにより、これまで漠然と個別に議論されてきた事例研究を整理し、分野横断的な議論をも可能にする問題提起が可能となろう。これを図示すると、「国」と「地域」、「市場」と「生活」

を軸とするマトリクスになる(図1)。この2つの軸の交点は時代や地域によって動き、重心が変化する。この可変性こそ、時代や地域の特徴、主体の関わり方とせめぎ合いなどが映し出されると考えられる。

以上のような問題意識にもとづいて、7名の研究者に報告を依頼した。このうち、他分野との横断的議論を意図して、日本中世史学の橋本道範氏(滋賀県立琵琶湖博物館)と、農業経済学・農業史学の伊丹一浩氏(茨城大)に加わっていただいた。そのうえで、「権力と所有」、「市場と生活」、「技術と利用」をテーマとした3つのセッションを設け、特に「技術と利用」については、「水」をめぐる国際比較研究を意図して、日本、フランス、中国の事例をご報告いただくことにした。結果

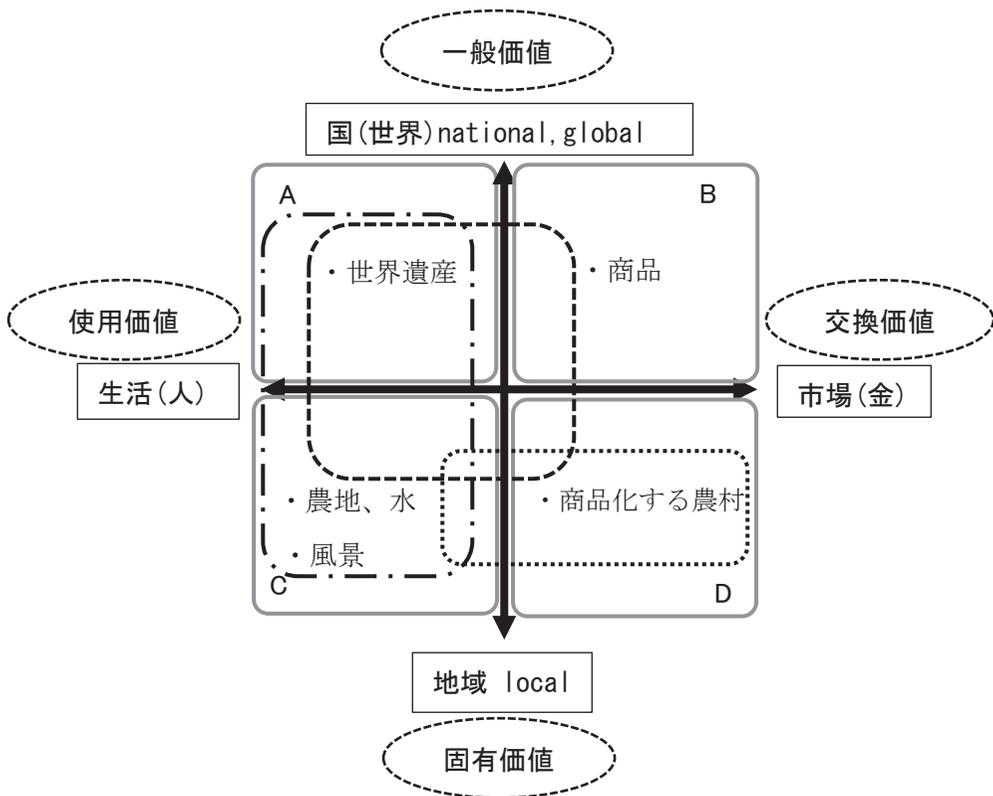


図1 地域資源の分類イメージ

的に、時空間とも幅広い、多様な報告によって本シンポジウムが構成されることになった。「地域資源論」の射程の広さを示したことが、今後、できるだけ多くの会員による報告と議論の広がりにつながることを願いたい。これら3つのセッションにはそれぞれオーガナイザーを含む3名がコメントすることとした。

次に、各報告の位置づけと意図を説明する。

#### <第1セッション：権力と所有>

本セッションでは図1の縦軸、すなわち「国家」と「地域」との関係に焦点をあてる。特にこれまでの資源論の中でも議論が蓄積されてきた「鉱物資源」と「林産資源」をめぐって、それを地域の側から再考しようとするものである。

①原田洋一郎報告「地域と鉱物資源」では、『近世日本における鉱物資源開発の展開—その地域的背景』（古今書院、2011）の著者である原田氏に報告を依頼した。特に「資源は誰のものか」という問いに対して、近世から近代への移行期に着目するところに力点を置き、近代の「鉱山王有」の思想と「鉱業権主義」を関わらせて議論している点は重要である。

②米家泰作報告「草原の『資源化』政策と地域—近代林学と原野の火入れ—」は、『中・近世山村の景観と構造』（校倉書房、2002）をはじめとして、日本の山村の歴史的展開を実証的に再検討してきた米家氏の報告である。原野の火入れをめぐって、それを禁止して林地への改編を意図する国家の「資源化」政策と、馬の放牧を生業とする地元住民の反証実験運動の両方を描くことで、両者のせめぎ合いが浮き彫りになる。近代以降、「国家」が目指す資源のあり方と、「地域」が培ってきたそれとの間に生じる齟齬が大きくなっていく過程の中に、地域資源をめぐる言説の変容が見出されることの意味を議論している。

本セッションに対するコメントは、近代のアホウドリとリン鉱資源をめぐる人びとと社会の関係を研究している平岡昭利氏にお願いした。

#### <第2セッション：市場と生活>

本セッションでは、図1の横軸、すなわち「市場」と「生活」との関係に焦点をあてる。2つの報告は、近年の「地域資源論」と密接に関わる観光地理学の成果をふまえて、地域資源をめぐる地域外の観光客と、地域内の住民との間の視点や価値観の違いに言及しようとするものである。

③須山聡報告「奄美大島の観光における地域の資源化と商品化」は、近年継続的に奄美大島で調査を実施している須山氏に依頼した。須山氏はすでに『奄美大島の地域性—大学生から見た島／シマの姿』（海青社、2014）を著している。この成果をふまえて、島の観光の様々な局面が、「地域資源論」として新たに提示され、特に「市場」との関わりが浮き彫りにされる。

④湯澤規子報告「地域づくりの系譜—山梨県甲州市の甚六桜とかつめま朝市—」は、③で明らかになった「市場」と地域資源との関わりと比較するために、「生活」と地域資源との関わりが見出せる事例を湯澤が報告した。これまで湯澤が発表してきた明治初期の葡萄栽培と葡萄酒醸造業の歴史を、現代の事象へと繋げた時に見えてくる一連の流れを「系譜」として示したことで、地域資源論に歴史軸を入れて考察することの重要性を主張するものである。

本セッションに対するコメントは、文化、生態、社会など様々な視点を含む農村研究を展開してきた野間晴雄氏にお願いした。

#### <第3セッション：技術と利用>

本セッションは、図1のマトリクスが時代差と共に地域差を伴う可変性を有するということを議論するために、「水」という1つの地域資源をめぐる技術と利用に関して日本・

フランス・中国の国際比較を意図したものである。

⑤橋本道範報告「日本中世における『水辺』の支配—播磨国矢野庄の河成をめぐって—」は、「地域環境史」の構築を目指して日本の水辺環境を追究している日本中世史研究者である橋本氏による報告である。自然環境と人間との関係を中軸に据えた村落論は『日本中世の環境と村落』（思文閣出版、2015）として刊行されたばかりである。橋本氏によれば、水辺は洪水などによって陸と河との両方になりうる可変性を持つ場である。本報告ではそれを「河成」の認定と減免の有無という制度と実態との乖離を通して明らかにしている。

⑥伊丹一浩報告「19世紀南フランス・アルプ山岳地における灌漑の利用と地域資源」は、農業経済学、フランス農業史の立場からの発言を求めて、伊丹氏に依頼したものである。『堤防・灌漑組合と参加の強制—19世紀フランス・オートザルプ県を中心に』（御茶の水書房、2011）などの著作がある伊丹氏は、一貫して緻密な地域調査と文書分析によって、人間の自然への働きかけと制度との関係を追究してきた。本報告では特に「灌漑」をめぐる19世紀フランスの山岳地帯の事例から、住民の制度や市場経済に対する能動性が示される。

⑦元木靖報告「地域資源としての水をめぐる環境史—中国・長江流域の事例から—」は歴史地理学において食と農と環境の問題を、日本のみならず中国をフィールドとして検討し続けてきた元木氏による中国の環境史の提示である。『中国変容論—食の基盤と環境』（海青社、2013年）はその総括としての成果であるが、ここで重視されているのは「水」という環境であり、長江の上流、中流、下流それぞれの地域における人間と水、農業生産活動との関わりが明らかにされる。

本セッションに対するコメントは、歴史地

理学における環境史の議論を牽引する溝口常俊氏にお願いした。

以上の報告をふまえて、総合討論を行った。聴衆からの積極的な質疑および意見と、それに対する報告者の返答による討論の後、オーガナイザーから本シンポジウムの総括を行い、次年度への問題提起とさらなる議論の継続を呼びかけ、シンポジウムを締めくくった。

（筑波大学・生命環境系）

#### 〔注〕

- 1) 竹中克行・齋藤由香『スペインワイン産業の地域資源論—地理的呼称制度はワインづくりの場をいかに変えたか』ナカニシヤ出版、2010、横山智編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究第4巻 資源と生業の地理学』海青社、2013などがある。
- 2) 例えば、片柳勉・小松陽介『地域資源とまちづくり—地理学の視点から（地域づくり叢書）』古今書院、2013、201頁では、「地域資源とはもともと地域に備わっているもので、発見あるいは再発見・再評価されるものである」という説明にとどまっている。
- 3) 野田公夫編『農林資源開発の世紀—「資源化」と総力戦体制の比較史—』京都大学出版会、2013や、本田恭子『地域資源保全主体としての集落—非農家・新住民参加による再編を目指して—』農林統計協会、2013などがある。
- 4) すでに、佐藤（2011）など、地理学以外の分野から、地理学における資源論の系譜を整理し、今後の方向性を展望する必要性が主張されている。佐藤仁『「持たざる国」の資源論 持続可能な国土をめぐるもう一つの知』東京大学出版会、2011。
- 5) 地理学の「資源論」を牽引してきた石井素介氏自身によっても、「資源論」の新構築に向けて、「地域」に着目する意義が提唱されている。石井素介『「資源論」の新構築に向けての課題—書評に代えての覚え書—』経済地理学年報60（1）、2014、37-46頁。